

## 高次脳機能障害は子育てにどう影響するか

### Parenting for individuals with acquired brain injury

船山 道隆<sup>1)</sup>, 中川 良尚<sup>2)</sup>

**Key Words** : 高次脳機能障害, 子育て, 公的支援

#### はじめに

高次脳機能障害と就労の関係はさまざまな報告がなされている。一方で、子育て中の女性が脳損傷による高次脳機能障害を呈した場合、子育てにどのように影響するかという検討はあまり知られていない。今回われわれは、中学生以下の子供を持ちながら高次脳機能障害を罹患した母親例から、高次脳機能障害の子育てへの影響と対策を検討した。

#### 1. 対 象

対象は、2013年1月から2017年11月までの間、足利赤十字病院高次脳機能障害外来通院中で中学生以下の子供の子育て中に脳損傷後1年以上経過しても高次脳機能障害が残存した13例と、江戸川病院心療内科外来通院中で同時期同様の例2例の合計15例とその子供26例。疾患は頭部外傷6例、脳血管障害5例、辺縁系脳炎2例、脳腫瘍1例、神経サルコイドーシス1例である。15例の発症年齢は $35.3 \pm 4.6$  (範囲28-42)歳、発症からの経過年数は $3.6 \pm 3.4$  (1-10)年、教育歴 $13.2 \pm 1.8$ 年。神経心理所見は、HDS-R  $23.1 \pm 6.8$ 、標準意欲評価法の面接による意欲評価スケール $20.7 \pm 10.5$ 、WAIS-III言語性IQ  $79.1 \pm 13.0$ 、動作性IQ  $81.3 \pm 12.6$ 、リバーミード行動記憶検査標準プロフィール点 $11.5 \pm 7.1$ 、改訂版Wisconsin card Sorting Test 達成カテゴリー数 $3.1 \pm 2.2$ と、軽度から中等度のアパシー、エピソード記憶障害、遂行機能障害を認めた。

#### 2. 方 法

1つ目として子供に明らかな臨床上の問題行動が出現した例を挙げた。次に社会参加の指標であるCIQ community integration questionnaireの低位項目である親役割割(2:子育てを1人とする, 1:子育てを他の人と一緒に/分担してする, 0:子育てをせず, 誰か他の人がする)の3段階評価を用い、病前後で親の役割の変化を調べた(ウィルコクソン符号付順位和検定)。

#### 3. 結 果

26例の子供のうち5例(19.2%)に明らかな問題行動が出現した。5例のうち3例が数ヶ月以上の不登校, 1例が薬物中毒(覚せい剤), 1例が家族と音信不通になった。また, 26例の子供のうち4例の子供(15.4%)が転校を余儀なくされた。母親15例中1例(6.7%)が高次脳機能障害のために離婚となった。CIQの親役割割は病前 $1.9 \pm 0.3$ から病後 $0.8 \pm 0.7$  ( $p < 0.01$ )と明らかな低下を示した。病前は15例中13例で子育てを1人とするレベルであったが, 病後は15例中2例のみに減少した。多くの例で夫, 高次脳機能障害者の母親や夫の母親, あるいは親戚からの協力が得られていたが, 明らかな問題行動が生じた子供5例はいずれも母親以外の家族や親族からの支援が得られにくい例であった。

1) 足利赤十字病院神経精神科 Michitaka Funayama : Department of Neuropsychiatry, Ashikaga Red Cross Hospital

2) 江戸川病院リハビリテーション科 Yoshitaka Nakagawa : Department of Rehabilitation, Edogawa Hospital

#### 4. 考 察

本研究から、高次脳機能障害によって1人では子育てができないレベルになるなど、母親として十分

に機能できなくなることが明らかになった。その結果、子供に明らかな問題行動が生じているケースが2割ほどで認められた。子育てに協力できる家族や親戚の確保、また、障害福祉サービス、介護保険、障害年金、児童相談所などの公的な支援を可能な限り取り入れることが必要であると考えられた。